

小田実全集（小説 第35巻）

さかさ吊りの穴 「世界」十二篇



講談社

小田実全集

Makoto Oda



目次

「あ島」、あるいは「ワカラナイ」	6
さかさ吊りの穴	24
五十メートルの距離	43
知覧・五円銅貨	62
トリマルキオーの饗宴	83
旅券	102
乱世の英雄	123
一等車	144
武器よ、さらば	165
マイ・イングリッシュ・ガーデン わたしのイギリス庭園	190
戦争	212

ことば、あるいは、万国共通語としての英語

あとがき

さかさ吊りの穴

「世界」十二篇

「あ島」、あるいは「ワカラナイ」

テレビのニュース番組をつけたら、女が眼をむいて怒っていた。白い女——顔の色の白さがまず目立つ白面、白人の中年女だ。「眼をむいて」という言い方が、この場合、当たっている。それほど女は怒っていた。細い眼が怒りで吊り上っている。怒りの白面で、女は早口にまくしたてた。日本語のテロップがのろのろ画面に出た。まくしたてるのが早すぎてついていけない。そんな感じだ。

アメリカ合州国の国務長官をしている女性だった。いつも誰に対しても怒っているような女性だが、今、彼女が怒っている相手は、これもまたいつもアメリカ合州国に楯つく、いや、彼女の怒りの言い方で言えば、平和と秩序を愛し、重んじる国際社会に戦争と反秩序をぶち込んで来るイラクの独裁者サダム・フセインだ。一度、湾岸戦争でこっぴどく懲らしめてやったが、今、またぞろ、イラクの戦争準備を防止するための正義の国連監視団から自分の国のメンバーを追い出しにかかった。これが怒れずにいられようか。彼女は怒った。怒り狂った。この表現が不適切でないのは、この国務長官がほんとうに怒っていたからだ。「公」的にも、「私」的にも、個人的にもだ。

私も日本で長年生きて来て、また世界各地へも出かけて、政治家、役人、軍人、論客、教師など大中小、小さまざまの公的人間が「公」的に怒ってみせる現場にいくらでも出くわして来た。集会、会議、教室、記者会見、テレビの番組においてである。しかし、そんなとき、怒りを獅子吼ししくしたあと、怒っ

たはずの当の相手と仲よくしゃべり、メシまでいつしよに食う。これがたぶん誰にとつても他人ごとでないのは、鬼畜米英に対しての怒りに燃え上つたはずのわれら日本人が、一九四五年、まさに一夜にして転向をとげて、先方が申されることなら何んだつてきく無二の盟友になり、その関係がそのまま今日に至るまでつづいているという一事がよく示している。

白面國務長官女史の怒りは、こうしたうさんくさい「公」的怒りとちがつて、「公」的怒りに「私」的怒りが重なり合つた怒りだ。ここに彼女のユダヤ人としての出自をからませるのはフェアでないと思う。それより彼女は彼女が最善、最上と「私」的にも「公」的にも信じ、マイ進している国際社会に対してサダム・フセインがまっこうからぶつこわしにかかつて来ている——そのこと自体に「私」的にも「公」的にも怒っているのだ。その意味で怒りはほんものだった。そして、それゆえにまさにこわい。アメリカ合州国は世界最大、最強の国だ。それが「公」的にもつ力が、「公」的怒りに「私」的怒りがつけ加わつたかたちで使われるとなると、結果はいかなることになるか。こわい。

この白面女士には（これから「白面女史」と書かずに「白面女士」と中国、朝鮮流に書くことにしたい。その書き方のほうが怒りの強大国の國務長官にピッタリする）、どんなふうに見えているのか、と気になり出した。彼女のほんもの怒りは、もちろん、彼女に世界がどんなふうに見えているかにかかわっている。これもこわいことだ。彼女のそのときどきの世界認識に、彼女の怒りと強大な力の行使が結びつけば、いかなることが結果するか知れない。

私は以前に、その昔ナチ・ドイツの彼女と同業のお役人だつたりツベントロップ外相が彼を訪れた

お客に大きな地球儀を見せている図柄の写真を見たことがある。いや、それは実際の写真ではなくて、その話を読んで私が勝手に記憶のなかに写真として焼きつけてしまった映像であつたかも知れないが、お客はたしか日本の大使であつた。リッベントロップ外相は「すらりとした長身の上からのぞいた上品な顔、全く五分の隙もないといった感じで」「女性から見ると独逸の代表的な好男子」だと当時彼に会つた日本の同盟通信社記者が書いていた人物であつたが、さて、彼の眼にうつる世界はどのようなのであつたのか。もちろん、この「独逸の代表的な好男子」の外相も、公平に見て好男子の程度のはるかに劣るヒトラー総統（については、この同盟通信社記者氏は、「床しい心」をもつ「偉大な独裁者」だと書き、歌ごころのあつたこのジャーナリストは、「千足穂の秋をほがひの絵に見たりヒューラーは床しき人にしありき」と一首ものしていた）のカイライにすぎなかつたから、これは「床しい心」をもつた人がどう世界を見ていたかということになる。あるいは、彼の「床しい心」の眼に世界はどう見えていたか。

私はあまり「床しい心」をもっていないので、それは、「世界まるごといただき」というようなものでなかつたかと思う。「床しい心」をもっていないついでに言えば、地球儀ほど、こうした「世界まるごといただき」に適したオモチャはないにちがいない。さて、それでは、リッベントロップ外相の同業者、白面女士はどういうことになるのか。彼女は彼女自身のこのオモチャをもつて、世界をまるごとかかえようとしているのか。さらには「世界まるごといただき」を彼女もまたもくろんでいるのか（ヒトラー総統に彼女の雇い主のクリントン大統領を引き合いに出すのは、いくらなんでも公正を欠く。「床しい心」でやめにする）。

ただ、ここでもうひとつ言っておきたいことがある。それは、それでは、リッペントロップ外相のお客の日本人大使には、どう世界が見えていたか、という問題だ。この大使はたしか三国同盟の強力な推進者だった元陸軍将軍の大島大使であつた。彼も地球儀を眺めて、「世界まるごといただき」と思つたかどうか。これは大いに疑問だ。

彼はなるほど日本のナチ心酔者の高級軍人として三国同盟の強力な推進者となり、のちにはその功績で大使にもなった人物だが、そうだからと言って、「世界まるごといただき」という大妄念に取り憑かれていたとは私にはとうてい思えない。これはすべて当時の日本のえらいさん方に言えたことで、彼らの考えていたことは、大きく言つても、アジア全体をなんとかわがものとして、資源をなんとか確保、ドイツ自体をふくめて西洋の強大国と肩を並べる大国として、これまで世界に君リンして来た大国と同様世界に君リンしたいということではないか。そのためにすでにして西洋大国のドイツの力を借りるということとはあつただらう。ここで思い出すのは、私が子供のとききかんに言われた、さかに言われたおかげで今日まで記憶することになった「五大列強」ということばである。「英米仏独」と上から強国の順に並んで、おしまいがわが日本の「日」——だったかと思う。面白いことにこの「五大列強」のなかには三国同盟の一国である「伊」がまったく入っていなかったことだが、日本人が何んとケンキョであつたかと今思い出しても考えるのは、私が子供心にも「日」が「英米仏独」の尻尾にやつと来て、その先頭どころか中ほどにも来ていないことになんのふしぎも抱いていなかったことである。誤解のないように書いておきたい。私が子供として、いや、「少国民」として生きていたのは、

日本は世界に冠たる偉大な神国だ、「東洋の盟主」だと言つて騒ぎ立てられていた世に言う軍国主義の時代なのだ。なるほど、今考えてみると、日本は「盟主」は「盟主」でも、「東洋の盟主」ではあつても「世界の盟主」ではなかつた。つまり、「五大列強」の一員として、ほかの「四強」に「東洋の盟主」として認められたかつた。いや、ドイツが「英米仏」をやつつけて順位のトップに立てば、ドイツに引き上げてもらつて、その次ぐらいに行きたかつた。

防共協定は結んだものの、「床しい心」をもつ「偉大な独裁者」が日本人には何んの連絡もしないで、突如、当の「防共」が対したはずの、これは同じ独裁者ながら「床しい心」の代りに「冷鉄の意志」をもつと歌人記者氏が彼の旅中吟でうたい上げたスターリン首相（この旅中吟も紹介しておこう。「この人のいづくにありや冷鉄の意志は読みがたし笑ふスターリン」と握手したことで関係が冷えきつてしまつたドイツに日本人がこれまた突然に「バスに乗りおくれるな」と熱狂し出したのは、ナチ・ドイツがこれもまた日本人に何んの連絡もなくヨーロッパで始めた「世界まるごといただき」戦争で、お得意の電撃戦でまず「仏」をまたたく間に征服、ついで「英」をダンケルクで海中に叩き出したからである。この偉大な「独」と組んでドイツ運輸の「世界まるごといただき」バスに乗れば、とにかく「東洋の盟主」も「五大列強」の上位に行ける。「独」の偉大な力の行為のおかげで「英仏」の上位に立つのはまちがいないし——だが、さて、それでは「米」とどういふことになるのか。ここで事態は当然ややこしいことになる。なつた。

例の歌人記者氏は、白面女士、ナチ「好男子」氏と同業の松岡洋右外相のひきいる代表団の随行者としてドイツへ行つたものらしいが、彼らが列車でモスクワからベルリンにやつて来たとききたい

へんな歓迎ぶりを「今度の旅行を通じて最大の感激の一つ」だと書いていた。なにしろ全市の職場が休業、沿道に市民が歓迎の隊列をつくり、八万本の日の丸の小旗をふり、建物からは日章旗とハーケンクロイツの大的ぼりが吊り下げられるという歓迎だったから、歌人が大感激してふしぎはないが、その光景を書いたあとを彼は次のようにつづけていた。

「かつて、このベルリン郊外のスタジアムに西田が、前畑が揚げさせた日章旗の感激を、私は胸をどらせながら国際放送でできたことがある。それとは違ふが、この日のベルリン大通を埋めつくした日章旗は、これは一体、誰が揚げさせたのだ。直接のヒーローは勿論わが外務大臣だが、その背景にあるのは一億の国民だ。日本の国力だ。八紘は既にして一字である。我らの日本は既にして世界を指導してゐるのだ。稜威の畏きを思ひ、祖国の誇に燃えて私は目頭を熱くしながら胸を張り、手をあげて、車中から群集の歓乎にこたへた。」

この当時のジャーナリストの書いていることにつけ加えることは何もない。すべてがここに言いつくされている。いや、ひとつつけ加えることがあるとすれば、このあいだ日本のサッカー・チームがアジアのどこかの国のチームに勝ち、これでなんとか世界大会へ参加の切符を得て行けるようになった。そのとき、テレビを見ると、熱狂して吠え立てるサポーターと称する日本人のみならず、いつもは辛口の批評、または小言をすることで評判の当代のジャーナリスト論客氏までふくめてナミダを流し、これでわがサッカーも世界的になった。胸を張り、手をあげて、歩ける。フランスへ行けるとカンコの声をあげた。

こうした事態の展開を見ると、わが日本人には当代に至るまでケンキョ、いや、いじらしく、あるいは、いじましいところが多分にあつて、「世界まるごといただき」の心境にはなかなか立ち到らないものらしい。すくなくとも、「世界まるごといただき」は自前のこととしてはならず、だ。それでは大島大使にしても、彼のボスの松岡外相、さらにそのボスのコノエ大貴族氏、それを引き継ぐ東條官僚軍人氏にしても、世界を地球儀として見ていなかったことになる、いや、世界は地球儀としては見えていなかった。それでは、何んとして見えていたか。私の考えでは、一枚の地図——世界地図として見えていた。

ただ、この世界地図、世界全体が等分に鮮明には見えていなかった。ヨーロッパは西半分あたりはよく見えていたが、その東半分とか、中近東、アフリカ、中南米とかは、遠いし、事情がよく判らぬので鮮明でなかったが、中国からこつちのアジア、アメリカ合州国に至る太平洋あたりはよく見えた。そのつもりでいた。そうでなかったら、東アジアから太平洋にひろがる大戦争を始められるはずはなかった。その地図でわが日本人は戦争を始めた。あるいは、協力、参加した。いや、多くは参加させられた。

しかし、はじめはよく心得ていたはずの世界地図。その部分も、いざ戦争を始め、拡大して行くと、そこにもさつぱり内情も何も判らない地名が次々に出て来た。地名自体さえがそれまでに一度も聞いたことがないしろものだ。しかし、すでにいくきは始まっているのだ。まったく知らないところだと行って行かずにすまされない。仕方がない。あいつを行かせる。いや、こつちはこいつだ。こいつに行かしておけ。

私がここで連想するのは、私が飛行機の切符の手配を頼む旅行者のグチだ。私はどうも世界旅行ばやりの当今でも常識外れの土地へよく行くらしくて、それも一回の旅行であちこちそういう土地をつらねて行くので、彼女あるいは彼が必ずずボヤク。「こんなところ、わたし行つたことありませんし、どんなところか判りません。」私は旅の案内の資料を山と入れた、そのはずのファイルを開け、と言う。しかし、これはほんとうに二、三度あつたことなのだが、その地域のラベルをつけたそのファイルいざ開けてみると、なかはみごとに空^{から}。しかし、旅行者たる者、客の求めに応じて、行つたこともなければその地名も今客から聞いたばかりの土地の飛行機の切符をつくり、どこをどう通じてするのか便の手配もしなければ旅行者ではない。あるとき、帰つて来た私に出会つた彼女（彼だつたかも知れない）は旅行の首尾を訊ねた。私は答えた。「うまく行つたよ。ただ、きみがつくつてくれた切符には、一枚、とつくの昔に破産してもうこの世の中にどうやら存在しないと見える航空会社の便の切符があつた。ほかの一枚の切符の目的地はなかつたよ。どこへ行つてしまつたのだろう。」「さあ、どこへ行つてしまつたんですか。神隠しにでも会いましたんですかしら。」彼女もさるもの、うまい答を口に出した。

私は、ことに太平洋の彼方へ戦争がひろがるにつれて、タウイタウイとかピアクとかウエワクとかガダルカナルとか、そんなそれまで日本人の誰も聞いたこともない地名の島やら何やらの土地にあちこち部隊をばら撒いた——撒かざるを得なくなつた大日本帝国陸海軍のえらいさん方、大本營の方々はまさに私の見知らない地名の切符で困惑する旅行者のようなものでなかつたかと思う。ちがいは、私の場合は、私が勝手に選んだ地名の土地への切符であつたのに対して、その誰も知らない

土地に送られた部隊の兵士たちが手にしたのは、彼らが一切関知しないままに大本営という戦争旅行者の方々が彼ら自身まったく知らないでつくった切符、それもたいていが片道切符であったことだ。切符はできた。さあ、行け。えらいさん方は言った、あとは何んとかなる——なったか。

それでは私にとって世界はどう見えているのか。私にとっては、世界は、私の言い方で言えば、「さかさレンズ」のかたちで見えている。双眼鏡をレンズをさかさにして眼に当てると、むこうの人物、人物がすべて小さくなつて遠くにチンマリ、しかし、鮮明に見える。これが私の言う「さかさレンズ」で、世界はそのかたちで私には見えているのだが、どうやらこれはすべてカンベサンとカンベサンの電話のせいであるようだ。カンベサンは今言ったばかりの片道切符を無理やり持たされて太平洋上の孤島に送り出されてしまった男だが、なぜ私が世界は「さかさレンズ」のかたちで私に見えているのかと言うと、「世界」のことを少しでも考えたとたちまち彼がその「さかさレンズ」のむこうの世界からこちらにむかつてスタスタ歩いて来るのが私の眼に見えて来るからだ。いや、これは言い方が逆だろう。彼、カンベサンが「さかさレンズ」のむこうからこちらにむかつて歩いて来ることで世界がそこにでき上っている。それが、つまり、私にとって世界が見えているということだ。

カンベサンの行先だった太平洋上の孤島は、赤道の真上（いや、真下と言うべきか）近くの小さな島で、名前ももちろんついているが、ここで正式に書いてみたところで、みなさん、ご存知のはずはない。それで、そのころはよく大日本帝国陸海軍はその地域での作戦の名前に「ろ号作戦」というふ

うに平仮名をつけていたのでそのひそみにならつて「あ島」ということにしておきたいのだが、さて、この「あ島」はたしか日本のいくさのひろがりのなかで最東端に位置していた。つまり、日本から東の方角のもつとも遠いところに孤島はあつたということだ。

「あ島」についての記述は、(6) 襲撃 中部太平洋陸軍作戦(1)―マリアナ玉砕まで― 戦術史料研究部 戦術史料室 著 朝雲新聞社」に、「図表」の一個所のほかに本文にただ一個所出ている。二行半の記述だが、整理すれば二行になる長さの記述だ。「あ島(ここは正式の名称を私を変えた)には、見張所があつたが、米軍は二十一日深夜、潜水艦で七八名上陸させ、これを占領した。」これが記述の全文だが、この実質二行の先には行かえなしでこれは今や「マキン・タラワの玉砕」で世に知られる(私の少年時代には「よく知られる」と書いてよかつただろう。今は「少しは知られる」だ)いくさのマキンのほうのことが、「二十二日(一九四三年、「昭和」十八年十一月の二十二日である)」には前日上陸した米軍によつてすでに主要陸地が「占領された模様」と出ていたから、どう見ても、こちらの実質二行はことのついでに記述だ。もつともこの「あ島」のほうは、この大部の「戦史」の附録につけられた「太平洋、印度洋一般地図」にその存在と地名が虫メガネで見れば判るぐらいの一点と小文字とで記されているが、「図表」に「海軍見張所 駐屯兵力 約一五名」とだけ記されているだけで大部の「戦史」のどこにもあとの言及もない、たぶん、「あ島」の近くと推定されるので「あ2号島」としておきたい孤島は地図にさえその存在も地名もない。旅行者の女性が言つたように「神隠し」にでも会つてしまつたのか、カンベサンのいた「あ島」のほうは同じ「海軍見張所」でも、「駐屯兵力 約七五名」という多量なので、記述と地図にそのあとをとどめることになつたのか。もつともそのままに潜水艦からの

「七八名」の米軍上陸を受けて、「駐屯兵力」は全員自決し果てていた。

「あ島」へは、私はまえもつて計画を立てて行つたのではない。「マキン・タラワの玉砕」のあとを見に行つたら、この「あ島」の玉砕のことも小耳にはきんだ。じゃあ、行つてみよう——私は自分に言つた。「マキン・タラワの玉砕」では、約三千人の帝国海軍将兵が五日間のいくさで死に、いや、殺され、約千五百人の飛行場設営の軍属人夫も大半が死んだ。人夫のなかには、強制連行か何かで連れて来られた朝鮮人も多数いたことは、生存者（つまり、生き残つて、米軍の捕虜になつた人たち）のうち、マキン島にあつては日本人ひとり、朝鮮人百四人、タラワ島で日本人十四人、朝鮮人百三十二人という数字の対比で判るにちがいない。数字がいやにこまかいのは、米軍側の発表がそうだったからだ。日本側の発表はいつでも「約」でかたづけられている。ことに軍属人夫の場合がそうで、米軍の発表では軍属人夫の死者はマキン島で四百十四人、タラワ島ではそれが二千二百十七人の多数に上つていて、両島あわせると二千六百三十一人となつて、この死者の数は日本側発表より約千人も多い。死者は玉砕の戦闘後、すべて穴を各所に掘つて埋めた。作業はべつの島に移つて、玉砕のいくさのさまを「フリー・トゥ・ウォッチ」、つまり、「自由に見ていた」、あるいは、「タダで見っていた」という島のもとからの住民が米軍に狩り出されて埋めた。そう、当のこの穴掘つての死体埋めの作業をやらされた島民のひとりが私に語つたのだから、これはほんとうの話だと見てよい。いくさのあとは、「ノウ・ハウス、ノウ・トゥリー」で「ボデイ・オール・オーバー・ジ・アイランド」だったそうだ。つまり、島は見わたすかぎりの建物なき樹木なき廃墟、その上の死体、そしてその死体の臭気に充満していた。いくさそのものについては、「人が映画で見るようなものはわたしらは実際に見た。」「自由に」、ある

いは、「タダで。」彼は言つて、肩をすくめた。

そのいくさのあと——「ノウ・ハウス、ノウ・トゥリー」のあとはまだ歴然と残っていた。「ボディ・オール・オーバー・ジ・アイランド」のあとはもちろん残つていなかったが、今なお残る瓦礫のひろがりのなかに立つと眼に見えて来た。気がささくれだつた。死者のボダイをとむらうという殊勝な気持ではない。ただささくれだつた。そんなときにその男が、「ギョクサイの島ならまだあるよ、日本人は誰も行かんが」と言い出して、「あ島」の、彼の表現で言えば「小さなギョクサイ^{スモール}」の話をした。「誰も知らんから行かんのかも知れん。」日本語に訳すとたぶんそういう言い方になる。ピジン英語で、彼は私に言つた。「じゃあ、行つてみよう。」私はむしろ自分に言つた。

週に何回か出る十二人乗りの小さな飛行機で行つた。三十分ばかり赤道直上の紺青の海を飛んで、赤茶けた土の滑走路に着いたものどこへどう行つていいものか判らない。とにかく何もないところなのだ。折よくその島にどこからか帰任するという知事が同じ飛行機に乗つていて、彼が車の都合をつけて村の「レスト・ハウス」までつれて行つてくれた。車と言つても小型トラックだ。そして、知事と言つても、まだ三十そこそこの現地の若者知事で、ハワイの大学で勉強して来たのだという。小型トラックの荷台の上で立ち話をして、私は彼の氏素姓を知るとともに、私の島へ来た目的を話した。「とにかくここで死んだ日本兵がどんなふう^に死んだかを知りたいんだ。」つづめて言えば、そうなる話だ。知事とは英語で話した。ハワイの大学で勉強したというだけに知事の英語は上手だつた。

彼はいくさのときはもちろんまだ生まれていないし、ずっと島を離れていたので余計何んにも知ら

ないと言ったが、それでも知事だけあつて、昨年は日本から遺骨収集団がやって来て、南の方にある彼ら日本兵の自決の場所にそのまま埋めてあつた遺骨を掘り出し集めて、もつて行った、そこで簡単な式もやったのに立ち会つたというような話をしてくれた。日本兵ははじめは七十五人いたとしても、米軍上陸時にはその数二十四人で、彼らは勇敢に応戦もしたが、結局生き残つた全員が集団で自決をした。彼はそんな話も私にくれた。そのときには、小型トラックはもう「レスト・ハウス」なるものに着いて、私は若き知事さんと「カプスタ」と彼らが言う——何んのことはない「カップ・スター」なる商標のインスタントの「札幌ラーメン」を食べながらしゃべつていた。この「あ島」のは「マキン・タラワの玉砕」の場合とはちがつて、日本兵は「小さなギョクサイ^{スモール}」を遂げたのではなかつた。全員自決をやつてのけた。知事さんの話で、そのこともはじめて判つた。

「カプスタ」を食べたあと、また小型トラックで彼らの多くが自決した場所まで連れて行つてくれることになつた。気のいい、そして、どうやらヒマをもてあましていたらしい知事も同行してそこまで行つた。サンゴ礁の切れ目の小さな海峡に面した、入江のような一角に日本軍は塹壕陣地をつくつていて、そこが集団自決の場所となつた。どんなふうにして集団自決をしたのか知るよしもないが、そこは遺骨収集団がやって来て掘り返したので、ただの穴掘りの現場になつていた。乱雑にゴロタ石が散乱している。

ただひとりだけ、自決の様子が判つている日本兵がいた。それが別の場所でひとりで集団自決ならぬ孤独自決をやつてのけたカンベサンだつた。

集団自決の場所へ小型トラックで行く途中、ヤシ林のなかで、トラックの荷台に私と並んで立っていた知事は、あの人は年をとっている、あの人なら昔日本軍がいたときのことを知っているかも知れないとひとり言のように言つて、小型のトラックの運転台の屋根を叩いてトラックを止めさせた。ヤシ林のなかの一本道を大きな山刀を手にした白髪の老人がスタスタ歩いて来るのが見えた。上半身裸かで陽に焼けた赤黒い肌を木の間かくれの陽光になかなか美しくさらけ出していたが、腰には薄汚れたベージュの腰布を巻いた年のころ六十歳前後と見えるその老人に特徴があつたのは、そのスタスタした歩き方だつた。あせらず、急がず、さりとのろのろとしていなくて、まさにスタスタと歩く。彼は知事の知人であつたらしくて、荷台の上の知事の島のことばでの質問に下から愛想よく答える。二人のあいだの間答が一段落したところで、知事はうれしそうに声を弾ませた。「やつぱりわたしは予想した通りです。この人、昔のことをよく知っているそうです。」

彼にも荷台に乗ってもらつて、小型トラックは動き出した。彼の名はシバ。そう知事は言つて、「日本人の名前に似ている。そうこの老人は言っています」とつけ加えた。シバさんはうなずく。私は彼に知事の通訳を通して、日本軍がいたとき、彼は日本軍のために働いたのかときいた。シバさんは大きくかぶりをふつた。ここには日本軍は基地も何もつくらなかつたので、使役に住民を狩り出すことはなかつたらしいと知事は説明してくれた。「住民と彼らとの関係はわるくはなかつたようだ。」知事はお愛想めいたことばも口にした。

「もうすぐ場所だ」とシバ老人は唐突に言つた。知事はそうすぐ訳してくれたが、老人が彼のことばに「場所」という英語を一言挿入しているのは知事が訳してくれるまえに私にも判つていた。しかし、

何んのための「場所」だ。私がいぶかしんでいると、「場所」はここだ、というぐあい身ぶりをしながら、シバ老人はまた突然に言い出した。これは訳してもらわなくても、すべて私にも判った。知事は運転台の屋根を叩き、小型トラックはまた止まった。私も老人も知事も誰からともなく荷台から降りて、ヤシ林のなかの一本道に立った。

そこで、その「場所」で、一本道を歩いていたシバ老人は米軍上陸の翌朝早く、小銃をもった日本兵士がひとり反対側から歩いて来るのに出会ったというのだ。老人はアゴをしゃくり上げるようにして、ヤシ林の先を指した。そこから歩いて来て、ここへ来た。彼がかなりのんきにそんなところを歩いて来たのは、米軍は入江のむこうの小さな島に上陸した早々でまだ本格的に攻めて来ていなかったからだ——と知事は老人のことばをルル訳してくれた。日本兵は彼の顔見知りで、まだ若かった。島のことばもカタコトをあやつった。カンベサンという名前だった——とこれは明瞭に日本語の発音で老人は日本兵の名前を口に出した。通訳の知事がかえって名前をとらえそねた。シバ老人は彼と同じくらいの年で、親しみがあつたかも知れない。シバ老人、いや、シバ若者は道で出会うとき、「カンベサン」と言つてあとは島のことばでアイサツし、彼も「シバサン」と島のことばでアイサツをかわした。

その日も、二人はそんなふうアイサツをかわした。そして、少しばかり反対方向におたがい歩き出したところで、シバ若者の背後で銃声がとどろいた。ふり返ると、カンベサンが道のまんなか倒れていた。慌ててシバ若者はそこまで駆けつけたが、カンベサンは自分の心臓部を小銃で射つたらしくて、もう断末魔の息だった。血が胸から面白いほど噴出していた。知事はシバ若者、いや、シバ老

人のことをそんなふうに訳した。シバ若者は思わず「どうしてこんなことをしたんです」とカンベサンに訊ねていた。「ワカラナイ」と彼は言い、そのままときれた。

知事はそう訳してくれたが、「ワカラナイ」はまさに彼が判らなかつた。「この人、今、わたしに判らないことを言いました。日本語かも知れない」と言つて、私を困惑しきつたふうに見た。シバ老人にもう一度言つてもらつと、「ワカラナイ」——それがシバ老人の口から正確な発音の日本語で出た。彼はそのときからずつとこのカンベサンのいまわのきわの日本語を、シバ若者からシバ中年、さらにはシバ老人になるまでの何十年、正確な発音でおぼえつづけて来たのだ。

カンベサンはシバ若者の「どうしてこんなことをしたんです」の質問に「ワカラナイ」と応じたのか、それとも彼の島のことばが「ワカラナイ」のだったか。私はシバ老人にきいてみたが、予測した通り、それはどちらとも判らない——と老人はもう日本語で「ワカラナイ」と答えるのではなく、島のことばで言い、知事は忠実にそう英語に訳した。それともう何もかもが「ワカラナイ」とカンベサンは言つたのではないか——ふたたび荷台に乗り、小型トラックが動き出して、「場所」^{プレイス}を離れかかつたところで私は不意にそう考えたが、それももちろん「ワカラナイ」ことだ。

この「ワカラナイ」は、深く私の心に沈み込んだ。日本へ帰つたあと、所轄のお役所に出かけて、カンベサンのことを調べようと私が考え出したのは、この事態が私の心にあつたからだ。官僚のハン文ジヨク札、ウヨ曲折、やつとこさカンベサンに関する資料のある部署にまで私はたどり着くことができたが、こういう部署のお役人にはことさらに不機嫌、したがつて彼を相手とする当方にとつては

不愉快きわまるのがえてして多いものだが、そいつはまさにその典型であった。腹が立ち、どなり出したくなるのをこらえてやつと出してもらった「あ島」戦死者の資料のファイル（またしてもファイルだ！）にカンベサンの名前を見つけ出したのは五時、彼の退庁前、ようやく遺族の名前と住所を書きうつして一路退散、それだけでカンベサンの「ワカラナイ」は何やらさらに心に重くのしかかって来た。

遺族は彼の弟だった。私は彼に手紙を書いた。べつに今さらお知らせすることでもありませんが、お兄さんの戦死された状況はこういうものでした——とあらまし「あ島」で体験したことを手短かに書き送った。おせっかい、という気もしたが、書き送らざるを得ないせつばつまった気持になつていたことも事実だ。「ワカラナイ」がそうさせたと言つてもよい。

返事は来なかった。二月ほど経つてもう手紙を書き送つたのも忘れかかったころ、突然、夕方電話がかかって来た。受話器をとると、「カンベです」と低い男の言い、「手紙をいただいて……」とあとは口ごもつた。「手紙をいただいて、うれしかった」でもなければ、「ありがとう」でもなかった。「迷惑だ」とは、さすがに言わなかったが、何やらブリブリと怒つてた。そのブリブリした調子がそれだけの短かいことばのなかにも十分に出ていた。いずれにしても、何んにしても、おそすぎた。そう口調が言っているようでもあった。手おくれだ。それも聞こえた。いずれにしても、何んにしても、私が黙っていると、低い声は、「本人が出るよ」とまた唐突、無愛想、ぶつきらぼうに言つた。「本人？」と思わず叫び返すと、「出ると言っているよ」と低い声はつづけ、たしかに、受話器の底の先方が替るけはいがあつた。けはいはあきらかに私の耳に伝わつて来た。しかし、そのあと、先方は

何も言わなかった。私も何も言わなかった。沈黙はつづいた。何か遠い深いところから沈黙はつづいていた。

弟が私をからかっている、オチヨクツテイルのではないかという気はしたが、オチヨクツテイルにしても何か遠い深いところではしている。

私はシバ老人の姿を思い出した。ヤシ林のむこうから一本道を歩いて来る上半身、赤銅色の裸か、下半身は薄汚いベージュの腰布をまとった彼の老人くさい姿だ。その彼が一本道のむこうからこちらにむかってスタスタと歩いて来た。双眼鏡をさかさに眼に当てた、「さかさレンズ」の世界のかたちでその姿は私の眼に見えて来ていた。遠い、しかし、へんに明るい世界から彼がスタスタ歩いて来るうちに、彼の姿はいつのまにかシバ若者の姿に変わっていた。しかし、これはどうもカンベサンの姿ではないか、それを私は今見ているのではないかと、私は途中で気がついた。

さかさ吊りの穴

何年かまえ、私は「西」ベルリンで家族といっしょにくらした。家族ははじめ私が「人生の同行者」と呼ぶつれあい一人だったが、そのうち娘が生まれて、大小二人の「人生の同行者」の家族になった。そのころはまだ「ベルリンの壁」のあつたところで、だから私は今「西」ベルリンというぐあいに住居地の帰属をはつきりさせて書いているのだが、「西」ベルリンは周囲を「壁」に取り囲まれた、そのころよく使われた言い方でいえば、「東」ドイツという今はこの世界から消滅してしまった国のなかにぼっかり浮かんだ「陸の孤島」だった。私はよく私の住居の近くのスーパー・マーケットのまえの停留所から二階建てのバスに乗って「西」ベルリンの各所に出かけたが、どのバスにどう乗っても、東西南北、バスの行き着く先のたいていが「壁」だった。バスはときには「壁」に沿って走り、二階の座席に陣取っていると、「壁」のむこうの別世界のさまはいやおうなしによく見えた。

「壁」のむこう側にはまず地雷やら何やらの物騒なものが無数に埋められているというふれ込みの無人地域の帯が「壁」に沿って走り、さらにそのむこうに低い「壁」がたち、その二重の壁のむこうから「東」ベルリンという別世界の都市が始まっていたが、その別世界の都市には、建物にも道路にもろくに人影がなく、いつもひっそりと静まり返って見えた。そして、全体がすべてどこかささむぎむとしてうらぶれている。新しい建物はろくすつぽなかったし、あつてもいかに安上りにでき上った集

合住宅のコンクリートの壁はすでに汚れてくろずんでいるし、窓枠も錆びついていて、十分に古ぼけていた。全体として別世界は貧寒として見えた。貧寒——この二文字の漢字が今思い出しても眼に浮かび上って来る。

しかし、「西」ベルリンも、元来がその政治的帰属先の——そのはずの「西」ドイツから見れば別世界だった。そして、この人口二百万人の別世界も、「西」ドイツや西ヨーロッパのどこかの都市から帰って来ると、「西」ドイツや西ヨーロッパの繁栄からまるごと取り残された貧寒なものに見えた。「陸の孤島」のこの別世界に「西」から達するには、「西」のどこかの空港から飛行機に乗って「東」ドイツの上空を飛ぶか、「西」ドイツから「東」ドイツに入る国境（そこにも、もちろん、「壁」があった。そのころアメリカ合州国の人工衛星に乗せてもらって世界の上空をまわった「西」ドイツ初の宇宙飛行士の下界に降り立っての感想のひとつは、人工衛星からも「西」「東」ドイツの国境の全長千三百キロに及ぶ「壁」は明瞭に見えた——というものだった）、「東」ドイツと「陸の孤島」の国境、つまり、二様の「壁」においてセパード犬を連れた「東」ドイツの国境警備の係官による入念の検査を受ける列車で行くか、「壁」なり鉄条網なりで道路の両側を閉鎖したアウトバーンを列車同様に二つの国境——「壁」で長い柄のついた鏡を車体の下に突っ込まれるまでのこれまた念の入った検査を受けながら車でアウトバーンを高速で突っ走るかの三種の方法しかなかった。この三種の方法のなかでもっとも容易だったのはもっとも高価な飛行機使用の方法だったが、この方法を使うと、「西」ベルリンの「東」ベルリンに劣らぬ貧寒ぶりは上空からよく見てとれた。「西」のほうが「東」にくらべてたしかに新

しい建物も道路も多かったが、丹念に「壁」の存在をたしかめでもしないかぎり、「東」「西」のちがいは明瞭ではなかった。ことに夜、電飾きらびやかに夜空に映える「西」のどこかの都市から飛んで来たりすると、電飾まつたくきらびやかに映えていない「東」「西」ベルリンの夜の貧寒はきわだつた対照をなして見えて来た。「西」ベルリンに住んでいたあいだ私は一度パリから夜「西」ベルリンまで帰つて来たことがあつたのだが、まさしくその不夜城、いや、不夜都市のごとく電飾の海を周囲にくりひろげるパリの夜景を二時間ほどまえにあとにして来た私の眼には、わが「西」ベルリンは「東」ベルリンとともに夜の海の底に少しばかりの電光をきらめかす穴のように見えた。電光をきらめかすことで、夜の海を圧倒していたのではない。さびしげなきらめき（それはパリの不夜都市の電光のひろがりにくらべればまことにチラホラとしたものであつた）がかえつて周囲の闇の広さと深さをきわだたせた。その広い深い闇のなかにポツカリ穴が開いている。それが私一家の住む「陸の孤島」だつた。

「東」ベルリンは「東」ドイツの首都だつたが、「西」ベルリンは「西」ドイツの首都ではなかつた。その意味では、「西」ベルリンは「東」ベルリンにくらべてさえ政治的にいつそう貧寒としていた。いや、またそのころには「陸の孤島」は「西」ドイツの主権の及ばない旧連合四国の「占領地」だつた。実質上はアメリカ合州国、イギリス、フランス三国の管理下にあつたが、潜在的には旧ソビエトの占領下にもあつた。「陸の孤島」のなかには旧ソビエトの赤旗もひるがえる旧連合国の占領司令部のような建物もあつたし、ブランデンブルク門から少し「西」ベルリンに入った「東」「西」ベルリンを貫通する——いや、元来は貫通していたはずの大通りにあつた、一九四五年四月の赤軍のベルリン

ン突入を記念した、当時の突入戦車を飾った旧ソビエト軍の勝利記念碑にはレッキとした赤軍兵士が立っていた（ブランデンブルク門は「壁」のついむこうの「東」ベルリンの領域にあったが、アメリカ合州国歴代の大統領は「西」ドイツにやつて来ると、必らずその領域の「壁」のそばまでやつて来て、そこにしつらえられた「お立ち台」に上り、ブランデンブルク門をにらみつけながら「自由の擁護」をそれぞれにおらび上げた。なかでも才智にあふれたケネディ氏はそのありきたりのことばにつけ加えて、「われはベルリン人なり」とドイツ語でのたまったということだが、発音が少しちがって、あれだと「われはベルリン風のソーセージなり」と言ったことになる。そう消息通が教えてくれた。

首都でもなければ、まだ旧連合国の占領下にある、そこまでの行き来に何かにつけ面倒、あるいは高くつく三種類の^{方法}しかない「陸の孤島」に利にさとい「西」ドイツやその他の「西」の国の企業がやつて来るはずはない。それどころかともとベルリンに本拠をおいていた企業（の代表例が日本では「シーメンス事件」で知られた、ベルリンの一角に今なお「ジーメンス^{シュタット}市」としてまさに企業ぐるみの都市の名前をとどめる「ジーメンス」だ）もあらかた「西」ドイツへ本拠の事務所も工場も逃げ出してしまったのだから、貧寒は当然の帰結だ。いや、もうひとつ言っておかなければならないことがある。それはかつての戦争でもつとも激烈な被害を受けたのは、度重なる空襲の果てに市街戦の文字通りの死闘の戦場となったベルリンであったことだ。私たちの住居だった集合住宅の壁にも弾痕が残っているほどだったから、「西」の企業が放り出してしまった「陸の孤島」の各所にさら地が戦争の跡を歴然と見せて残っていたとしてもふしぎはない。さら、地は上空から見れば穴——貧寒の穴だ。穴はつらなりあつて、「西」ベルリンという全体の穴をつくり、そこに「陸の孤島」全体が落

ち込んでしまっている。二百万人の住民もそこに入り込んでしまっている。

首都でないので国のえらいさんの政治家もあまたの役人もいない。企業があらかたないので、アタツシエ・ケースを抱えて忙しげに働くビジネス・マンたちもろくにいない。もちろん、そうした国の根幹部分にかかわる連中の家族もいないとあつて、二百万人の住民でまず目立つのは、これでは人口が不足する、「東」ベルリンと「壁」で接する「西」ベルリンという自由主義世界の「シヨウ・ケース」の威信にかかわるとして政府がさまざまに優遇政策を打ち出すことにひかれて「西」ドイツ各地から移住して来た、あるいは逆に「西」ドイツへ行かずにここにどまっている老人たちで、その多くが女性だった。と書いても、私はここで女性の全世界的な平均寿命の長さに思いをさせて、やはり、女性には長生きするものだと感慨にふけるつもりはない。私が考えるのは、かつてドイツ人たちが派手にやつてのけた戦争のなかで、ドイツの男たち、あまた殺したが、あまた殺されてもいる——そのもつと血なまぐさいことだ。

老女性たちはたぶん食事は家でつつましくジャガイモとハム、ソーセージぐらいですませているにちがいないが、午後の「お茶」の時刻になると、老人無料、あるいは割り引きの二階建てバスに乗つて大挙都心にくり出して来て、戦前から存在して来たという「カフェ・メーリング」（わが森鷗外先生もかつてお通いになったという話だ）あたりで一杯の珈琲、紅茶と甘いこと果てしないケーキひとつをまえにして夕刻まで時間をつぶすということになって、これはたしかに目立つ。ことに冬場になると、どこにどうしまつてあつたのか、毛皮のコートを豪勢、また後生大事に着用になつてやつて来

られるのだが、よく見るとコートは古びている上に何箇所か裂けていたりして、全体の印象は、やはり、貧寒だ。そうとしか言いようがない。そして、話はまた血なまぐさいことになるが、この老女性たちのすりきれた毛皮のコートの豪勢、後生大事を見ているうちに、私の思いはいつもいったい彼女たち、あのいくさをどこでどう生きのびて来たかという疑問になった。いや、疑問はもうひとつあった。彼女たちはまちがいなくかつてはヒトラー・ユーゲントであれ何んであれそうした若者組織の一員だったのだが、さて、どんな顔でハイル・ヒトラーと叫んでいたのか。血なまぐさいことをこのついでにもうひとつ言っておけば、このベルリンは激烈な市街戦の現場でもあれば、その直後被害者は十万人をくだらないという激烈な強姦の現場でもあった。彼女たちのなかの何人がその現場を体験したのか。いや、体験しなくてすんだのか。

彼女たちのなかで、ごくまれなことだが、老マレーネ・デートリッヒとおぼしき佳人に出会うこともあった。その一人は私たちの住居の近くに住んでいるらしくて私は近所の肉屋でときどき出会う光栄に恵まれて胸躍らせたが、彼女はいつもハム二枚を主人にうるさく言っつきつちりと切らせ、あとは量り売りのジャガイモのサラダをこれまたきつちりと「一グラム少ない」と世界の一大事のように金切声をあげながらハカリで計量させて買った。

毛皮のコートの老女性たちについて「陸の孤島」の住人で目立つのは、若者だった。まず、学生、あるいは、学生のなれの果てとしての若者。ここでまず言っておかなければならないのは、旧連合国の占領地である「西」ベルリンは、「西」ドイツの若者が男性であるかぎり、その年齢になると実際に兵役につくなり「良心的兵役拒否」の道を選ぶなりして必ず直面する徴兵制が施行されていなかっ

たことだ。「西」ベルリンにやつて来て居住者となれば、自動的に徴兵は免除されてしまうのだから、これほど都合なことはなかった。難は名のある企業が逃げ出し、敬遠する「陸の孤島」にはろくすっぽい仕事の口がないことだが、これだつて名のない企業のいい仕事でない仕事の口なら見つけることはいくらでもできるし、こういうときもつとも便利なのは学生になることだ——とあつて、「西」ベルリンに若者が充満するのは理の当然のことだろう。そして、こういう若者には、生来規則やら秩序やらが肌に合わぬ自由愛好者が多いものだ。この連中がパンクやら何やらと称して頭を丸坊主にして街路をのし歩いていけば、おのずと「陸の孤島」に秩序ピン乱のけはいが立ち込めて来て、歴代のアメリカ合州国大統領氏がブランデンブルク門まえの「壁」まえのお立ち台に立つて「自由の擁護」をおらび上げなくても、「西」ベルリン全体が強力な自由の体現者となつて来るのは、これまた理の当然のことだろう。若い男性のことばかり述べているのではない、男あれば女あり、で、生来の秩序ピン乱的若者が「西」ベルリンに来れば、同じ生来の気質、性へキを持つ若い女性たちもあまたやつて来て、いつそう自由ににぎやかなことになるが、伝統の秩序機構から外れることは、そこに組み込まれた金儲け機構から外れることだから、とどのつまり、彼らには貧寒がつきまとう。自由には飢える自由もある。これもまた理の当然のことだ。

「陸の孤島」の住民でもうひとつ目立ったのは外国人だった。人口二百万人のうち外国人が二十数万人だったと言うのだから、これは目立つ。多い順に書くと、まずトルコ人、これは二十数万人のうちの半数、ついで、ユーゴスラビア人、ギリシア人、イタリア人……というぐあいにつづく。ユーゴス

ラビアン、ギリシア人、イタリア人はヨーロッパ人なので目立ち方は少ないが、トルコ人は人数が多い上に明瞭に非ヨーロッパ人だ。顔を見ても判る上に、女性はそれがイスラム教徒である証あかしか頭をスカーフでスッポリと覆つたりしているの、いつそう目立つ。彼らの多くが「壁」の近くのクロイツベルク区に住んでいて、その地下を走る地下鉄は「イスタンブール特急」という異名をとっていた。地上にもトルコ料理店やら食料品店がたち並ぶ通りがあつて、そこはまさにイスタンブール以西のトルコの一大都市であつた。

そのトルコ人たちもユーゴスラビアン、ギリシア人、イタリア人たちも、大半が「ガスト・アルバイター」という名で呼ばれた外国人労働者とその家族だつた。「ガスト・アルバイター」の「ガスト」が「お客」と「寄生虫」という二様の意味をもつことばであることで判るように、「西」ドイツの経済が好調なときにドイツ人がやりたくないような、ひところ日本ではやつた言い方で言えば「三K」の仕事をやらせるために招き入れた「お客」も、好調でなくなればたちまちやつかない「寄生虫」扱扱いされる人たちで、私が「西」ベルリンの住民になつたころにはすでに後者の扱いを彼らは受けていた。事態がそういうことになつて来れば、ものみな「西」ドイツという本家にくらべればはるかに秩序ピン乱的で自由な「陸の孤島」に彼らが集まつて来てふしぎはない。金儲け機構がガツチリでき上つていないのは残念だが、「陸の孤島」においてはそれだけ自由だし、白い眼で見られる度合いは少ない。このことは白い眼で見られる度合いが他の「ガスト・アルバイター」にくらべてはるかに大きい非ヨーロッパ人のトルコ人の「お客」寄生虫」諸氏とその家族諸君にとつて大事なことだつたにちがいない。その上すでにクロイツベルク区には「イスタンブール特急」までがその地下を走るトルコ人の一大都

市がすでにでき上っているのだ。いきおいこの一大都市は人口激増を続けた。もちろん、この人口激増のなかには、一大都市内部で赤ん坊がいくらでも生まれて来るという現象も入っている。

私の娘が生まれたのはこのトルコ人在住の一大都市の外の、しかし、「陸の孤島」内であることにおいて同じ地域の産科病院においてのことだが、母親が入っていた部屋の扉の掲示は、ドイツ語の次はトルコ語、ついで、ユーゴスラビア語、ギリシア語で書いてあつて、こういう「国際的掲示」に必ず顔を出す英語、フランス語は一切なかった。

その産科病院には在日朝鮮人の私の「人生の同行者」と韓国語で話す韓国人の看護婦さんがいたが、彼女もかつて韓国から看護婦としてやつて来た「ガスト・アルバイター」のひとりだった。韓国からかつては女性は見護婦、男性は炭坑夫として「ガスト・アルバイター」がたくさん来ていたが、その多くが韓国から外へ出てドイツ、ヨーロッパで「留学」したがつっていた学生たちだった。そして、そのなかで初志を貫徹して、二、三年「ガスト・アルバイター」の労働で貯めたお金を学資にして大学、大学院へ入ったのが男女ともに何百人といつて、彼らの多くの行先がまさに自由な「西」ベルリンであつた。「西」ベルリンには日本人は五百人ほどしかいなかったが韓国人は千五百人もいて、大半があつての「ガスト・アルバイター」で、彼ら自由を愛するかつての「コーリアン・ガスト・アルバイター」はたちまち当時の自由なき韓国の政治に対しての「民主化」実現の運動を形成して、私たちのいたころ、よく「西」ベルリン目抜きチャックのクードム大通りで長鼓を叩きながらデモ行進をしていた。一回のデモ行進に百五十人ほどが来ていたから、「西」ベルリン在住の韓国人の一角は参加していたことになる。

トルコ人にしろ韓国人にしろ、こうした「ガスト・アルバイター」は合法の「ガスト・アルバイター」だが、「陸の孤島」には他にいくらでも非法法の「ガスト・アルバイター」、つまり、招かれざる「寄生虫」としての外国人労働者がいた。「壁」は「東」の政府が「東」の住民が「西」へ逃げ出すのを防ぐ防壁として勝手に国境に沿って自分の領土のなかにつくったものであって、「西」はもともと「壁」の存在を認めていないのだから、ことベルリンに関するかぎり、「東」がいったん「壁」の外に出ることを許した、そう勝手に決めた人間は、どこの国のどの人間も「西」へいくらでも入って来られることになる。「東」ベルリンには人間の出入りを丹念、強引に検査する関門が「壁」にあるが、「西」の「陸の孤島」には「壁」はもともとないのだから、そういうことになっているのだから、そうした関門はまったくないのである。この奇妙な事態のおかげでアジアなり中近東なりのどこからか「東」ドイツかどこかの国の飛行機で「東」ベルリンの空港に着き、これから「西」ベルリンへ出ると言えば難なく入国させてくれた。そして、鉄道と地下鉄を使えば、人混みにまぎれていくらでも難なく「東」から「西」ベルリンへ入れた。いや、そのあとさらに「西」ドイツへ行くこともできる。こういう自らがつくり出した「壁」の特殊事情を使って「東」ドイツ政府は第三世界の「経済難民」をいくらでも自分の国の飛行機会社の飛行機を使って、いったん自国に入れたあとすぐ「西」へ送り出して「西」ドイツを困らせていたのだという話も私は聞いたことがある。「西」ドイツを困らせるとともに自分のところは儲かるのだから、まさに一石二鳥だ。

しかし、こうした特殊事情を最大限に利用したのが、「東」「西」双方のスパイでありエイジェントだ。「西」側陣営の韓国秘密機関員と「北朝鮮」(は大きな大使館を「東」の「壁」ぎわにつくって

た)の同種の人物が「西」ベルリン随一の百貨店「KA DE WE」の左右に上下するエスカレーターでにらみあいながらすれちがったというような話によく私も聞いた。

スパイ、エイジェントのことなどはどうでもよろしいが、大事なものは、こうした奇妙な事情によって救われて「西」ベルリンにやって来た、そして、生きのびることができた政治亡命者たちが多くいたことだが、そのひとり、アジアの某国からの政治亡命者Bのことが私に忘れられないのは、まず私が彼だったからだ。

ずっと以前、私がその某国を訪れたあとあちこちいろんな国をまわってヨーロッパはフランス、パリに着くと、すぐ友人がやって来て、これから自分がキモイリとなつて今「西」ベルリンに住んでいるその当の某国の重要な革命家の記者会見をする、出てくれ——と言うので、私は友人とともに記者会見なるものの場所に出かけたのだが、それはひとえについてこのあいだまだ私が滞在していたまぎれもない軍事独裁政権が政治を牛耳る国の強権政治に対して果敢にたたかいを挑む革命家の顔を見たかったからである。それ以上の何ものでもなかったとつけ加えて言つておいてもよろしい。

それがそれ以上のややこしいことになつてしまつたのは、「西」ベルリンからパリまでこの記者会見のために車でひそかにやつて来るといふその革命家がいつまで経つても到着しなかつたからである。たいした数ではなかつたがフランス人の新聞記者も何人か(たぶん大新聞の記者ではなかつた。こういう問題に関心のある「ミニコミ」の記者諸氏であつたかと思う)来ていて、名うての革命家がこの国の現在の状況について語るといふ記者会見が始まるのを待つていたが、待てどくらす革命家は現われない。事故、いや、事件があつたのではないか、フランスに入国できなかったのではないかとい

ろいろ主催者の友人は案じていたが（あとで判ったことだが、彼はただ道に迷って来られなかった）、ついに彼は私に一世一代の奇妙なことを頼んで来た。私に彼の替え玉になれ、というのだ。この記者会見はその国の革命勢力にとつてまことに重大な記者会見だ、キャンセルしてはならないし、またできない。さつきおまえはおまえがつい最近見て来たその国の状況について車のなかで話していた。あれはけっこうよかった。それをそのまま革命家になり代つてしゃべってくれ。英語でまくしたててくれれば、おれがフランス語にする。相手は大新聞でない小さな左翼系の新聞の記者だ。英語ができるのはたいしていいからバレなくてすむ、頼むからやってくれ、と言ひ出した。いや、もうひとつ、彼が口にしていたことがあつた。おまえはもともと南方系の大きな顔をしている上にけっこう陽焼けしている、それでアジアのことなんかろくに知らないフランス人にはけっこう十分にその国の男に見える——と、日本人の私とその国の人間に化けられるはずはないと決め手のことわり文句を私が口に出すまえに機先を制するように言つた。

私がついに彼の強引な頼みに屈して、その革命家に化けて記者会見を行なうという一世一代のサギをやつてのけたのは、彼の強引な頼みもさることながら、やはり、少しでもその国の現状をヨーロッパ、あるいは、小なりといえどもヨーロッパの新聞を通じて世界に伝えるべきだという気持に私自身がなつてしまつたからだ。このサギを私はきわめて良心的にやつてのけた。私の寸法の大きな顔と陽焼けた顔色が説得力をもつていたのか、それとも私の英語のまくしたてよりも友人のフランス語での通訳の雄弁に説得力があつたのか、化けの皮がはがれずにすんだ（それとも、彼ら小新聞のフランス人の記者諸氏も、私たちのインチキを見破りながらも、これは世界に伝えるべきだと彼ら自身が考

えていくれたのかも知れない)。とにかく質問に答えることまでこのインチキ革命家はやつてのけたのだから、われながら自らのサギ師ぶりに今さらながらおどろき、感動さえするのだが、それから何年か経って「西」ベルリンの滞在のために空港に着いたとき、誰かから私に来ることを聞いたのか、迎えに来た友人、知人何人かのなかに彼が入っていた。紹介されて私はそのときそこではじめて彼に会ったのだが、とつさに私の口を衝いて出たことばは、「わたしはわたし自身にはじめて会えてうれしい」だった。「わたしはあなたに会えてうれしい」と英語で言いかけたのを私はそう言いなおして、彼に言った。彼はすぐ私の言葉の意味が判ったのか、浅黒い顔の満面に笑みをたたえて、私の手を握った。私も彼の、いや、私自身の手を握り返した。私も彼もたしかに大きい顔をしている。

その彼でもあれば私自身でもあるBを皮切りに、私は次から次にさつき私が述べた「壁」の特殊事情を使って「亡命」して来た世界各国の革命家やら活動家やらに会い、何人かとは友人、知人になった。「東」の陣営からの「亡命」者もあれば、Bのように第三世界から、あるいは、「西」からも逃れて来た人物に出会ったもいた。そのなかにアメリカ合州国からの「亡命」者もいて（合法的に政治亡命を認められて彼は「陸の孤島」に住んでいたのではない。他の「亡命」者にも同じような人がいたが、「西」のどこかから「東」へ行つて、そこから「壁」の特殊事情を使って「陸の孤島」へ入つて来てそのまま非合法に住みついていて）、彼は彼の言うところではアメリカ合州国の「政治犯」だった。そうだしぬけに言われて私がおどろいた顔を見ると、あなたは昔アメリカ合州国軍の脱走兵を助けて日本からスエーデンかどこかへ送り出していたのではなかったのかね、あの連中と同じことだよ、あ

の連中もまぎれもなく「政治犯」だよ、と私の無知を教えさとすように言った。あの連中のなかに日本でつかまってアメリカ合州国の牢屋に送られたのもいたじゃないか。そう言うてから、彼は、あなた自身「政治犯」の逃亡を助けたおかげで、アメリカ合州国のお訊ね者になって入国がむつかしくなっているのじゃなかったのかねと念を押すようにつづけた。まったくその通りだったので、私は黙つてうなずいた。

Bは私一家が「陸の孤島」に住んでいたころ、はじめは工場労働者、ついでコンピューターのセールスマン、そのうち車を借金をして買つて個人タクシーの運転手——というぐあいになつてきた。彼はいろんな大学に行き、いろんな学位ももっていたが、あとから述べる事情によつてみんなちがう名前の人物になつての学位なので今は使えない。いきおい工場労働者その他でたつきを立てるより仕方がなかつたが、彼ともとは同国人、今はドイツ人となつた奥さんは薬剤師なので小学生の娘ひとりとの三人ぐらしはなんとかやつて行けた。Bは根が革命家だけに心やさしい親切な男で（心やさしい親切な男でない革命家がいるはずはないではないか！）、慣れない「陸の孤島」ぐらしの私の一家を、車をもつて来て引っこしを手伝ってくれたり、ときどき彼らの労働者街のなかの小さな集合住宅に招いて彼らの国のおいしい御馳走をいただかせてくれた。そして、ときどき彼は私たちのまえから姿を消したが、姿を消しているあいだ彼はどうかやら死の危険をおかして（つかまれば、必らず死刑だつた）自分の国に潜入して運動をもち立てたり新しく形成したりしていたようだ。ある日、彼はポツリと言つた。「家族ができる」と、運動は辛くなるね。」彼のかわいい小学生の娘を見ながら、その

しんどいことばを口にした。聞いていて、そのことばはほんとうにしんどかったので、「どうなっているのかね、あなたの国の革命は」と私はかえって軽口を叩いた。彼は、「革命はまだならず」と孫中山のようなことばで答え、そのやりとりがいつのまにか私と彼とのあいだのアイサツになった。会うたびに、二人はまずそう言い合った。

「今日、うしろの席から、おまえはイスラム野郎だろう、早く自分の国へ帰れ」と言って首をしめにかかつて来たのがいたと彼が話したのは、彼がタクシーの運転手をやり出してからのことだ。「おれは日本人だと言つてやつたら、慌ててやめたよ。おう日本人か、と言つてそいつは愛想よくなつた。」彼のそのことばが私の耳にこれも何やらしんどく聞こえたのは私の日本が彼の国をかつて侵略し、さんざんひどい目にあわせた国であつたからだ。

Bが「陸の孤島」にまでやつて来る経緯について、私はあるとき訊ねた。彼は決して自分から自分の過去を語ることはしない男で、そのときにも彼はなかなか語ろうとしなかったが、「あなたはわたしたつたことがあるのだ。わたしはわたし自身について知る権利がある」と私はうまい理屈を見つけて頼み込んだ。彼の小さな集合住宅の間で、彼の奥さんが横で何やら手仕事をしているときだ。

その理屈がきいて、彼はしぶしぶしゃべり出したのだが、彼はまずそのアジアの某国の高校を出てチェコスロバキアの大学の工学部に留学している。その留学は別にチェコスロバキアが社会主義国であつたからではない。留学先は、オランダでも「西」ドイツでもアメリカ合州国でもソビエトでも、どこでもよかつた。チェコスロバキアに行ったのは、チェコスロバキアの留学の条件がいちばんよかつたからだ。彼のそのときのその言い方で私が軽い衝撃のようなものを感じとつたのは、社会主義国の

現実をもうすでにそのときまでに知りつくしていたはずの私でさえが「社会主義」ということばにまだ何がしかの「夢」をもちつづけて来ていたからにちがひなかった。しかし、第三世界の人間の彼には、チェコスロバキアもオランダも「西」ドイツも、あるいはアメリカ合州国、ソビエトもすべてが彼に留学の機会をあたえてくれる先進国だった。そうであつたにすぎなかつた。

その事情は彼のそばで今手仕事をしている彼の奥さんにとつても同じだった。小柄でいつも陽気に笑つてゐる、いかにも南方系のおおらかな奥さんで、私の一家が大好きだつた女性だが、彼女はまさにそこに留学の機会ができたので、ブルガリアの大学に留学して薬剤師になる勉強を始めた。二人はまだ結婚してゐなかつたが幼いときからの知己で、ブルガリアに留学したのはそこからチェコスロバキアは近くて彼に会えるつもりでいたが、チェコスロバキアは彼女を入学させてくれない。二人がモンモンとしてゐるうちに二人の祖国で軍事クーデタが起こり、彼はクーデタの結果でき上つた軍事独裁政権に反対する運動に加わつてやがてお訊ね者になり、東ヨーロッパ諸国は相手が軍事独裁政権であらうと何んであらうと第三世界との反帝国主義の連帯の旗の下に関係をつづけて行かなければならない——とあつて、二人は東ヨーロッパ諸国でのお訊ね者になつて……というぐあいに書いて行けばきりがないので、ここで手つとり早く話にケリをつけるために二つのことゝらを書いておこう。ひとつは、彼女はこれまで「東」から「西」に至る経緯のなかで何度もちがう相手と結婚も離婚もしているが、いつも相手は名前を次々とかえ、居所も転々として来たBだつたことだ。「いつたい、あなたは名前をいくつもつているのかね。」私は訊ねたことがあつた。「さあ、いくつかね。」彼は笑つた。そして、まさにテンタンとして言つた。「しかし、私の国では伝統的に何度名前をかえてもいいんだよ。」

二つ目に書いておきたいのは、彼女と彼がいつかつげぎまに歌を歌ってくれたことだ。まず、突然、オキナワヲカエセ、ついで、ワカモノヨカラダヲキタエテオケ、これは日本語でやって——と言つても日本語はほんとうはまったくできない二人だったから、冒頭の部分だけ歌つて、ついで、金日キムイル成將軍ソンチヤンクンウイの歌、あるいは、ポーランド語でのワルシヤワ労働歌、そして、突然、また日本語、ミヨトーカイノソラアケテ、ラジオ体操、イチ、ニ、サン、……この彼らの歌の記憶のメチャクチャな集積が彼らの過去をそのままに言いあらわしているような気が私にはする。

「あなたはこのあいだここは穴だと言っていたな。」

彼の過去をひとしきり話し終ると、Bは私にポツリと言った。この「陸の孤島」は、「孤島」そのものが大きく世界のこの地域に穴をつくつて沈み込んでいる。そこに貧寒も入れれば老マレーネ・デートリッヒも入れれば戦争も入ればナチの過去も入れればバンクの現在も入れれば「ガスト・アルバイター」も入れれば「亡命」も入れればで、ありとあらゆる「西」と「東」の問題、矛盾がゴミのごとくぶち込まれている。そんなことを、私はたしかに酔っぱらつたあげくに呂律のまわらぬ舌で彼に言ったことがある。

「ここは尻の穴だと言つた『東』の詩人もいたよ。」

私はつけ加えるようにこのあいだ新聞で読んだ詩人のことを口に出した。「東」の反体制の詩人で「西」へ追い出されて来た詩人だ。問題、矛盾もそこに排セツ物として溜まりそこから外に出る穴として「陸の孤島」はあるのか。そう言いたかつたのか。

つづきは製品版でお読みください。